

河川環境管理財団ニュース

News Letter from Foundation of River & Watershed Environment Management



【卒園記念マラソン】

淀川河川公園の最上流端、木津川、宇治川、桂川の三川が合流する地点に景観保全地区の背割堤があります。ここで、京都府八幡市にある「なるみ幼稚園」が毎年卒園記念マラソンを行っています。(特集2 河川公園の活用について参照)

ニュースの項目

【巻頭言】

基礎研究と現場技術
研究顧問 長谷川和義……P2
挨拶
顧問 清治真人……………P3

【特集1】……………P4

水辺で安全に活動するために
1.はじめに
2.水難事故の傾向
(平成15年～17年の事故報道から)
3.水辺で安全に活動するために

【特集2】……………P6

河川公園の活用について
1.国営淀川河川公園(大阪府)

2.国営木曽三川公園
(愛知県、岐阜県、三重県)
3.豊平川・雁来健康公園(北海道)
4.当財団が管理する河川公園

【報告事項1】……………P9

1.「湖沼水質のための流域対策の基本的考え方」まとまる
2.住民参加による河川管理を目指した「河川レンジャー制度」の取り組みについて
3.郷土の文化財を活用した地域づくり
4.霞ヶ浦自然再生協議会

5.都市空間における未活用水の有効利用方策のパンフレットを作成しました
6.川の写真コンクール入賞者が決定
7.平成18年度 GGG緑化事業について

【報告事項2】……………P12

1.プロジェクトWET実施報告
2.第3回「身近な水環境の全国一斉調査」の集計結果について
3.第4回 集まれ!水夢きっず夢実現について
4.利根川で「子どもの水辺安全講座」を実施しました!

5.太田川せせらぎ夢学習塾でEポート体験

【河川整備基金コーナー】…P15

1.河川整備基金・自主事業
流木災害軽減対策と河川樹木管理に関する総合的研究

【お知らせ】……………P16

1.河川整備基金・自主事業
河川汽水域の水環境と生物環境に関する研究成果発表会のご案内
2.平成18年度 水辺を活かした環境学習・体験学習に関する全国事例研修会開催のご案内

巻頭言

基礎研究と現場技術

本年4月から当財団研究顧問として北海道事務所に勤務しております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。これまで、北海道大学で河川工学の研究に携わり、沖積蛇行の発生発達機構、河岸浸食機構、山地河川の形態と流れなどを主な専門にしてきました。

自分の研究について少し距離を置いて振り返りますと、大学に固有なアカデミックな知見を追い求めていたことを感じます。優れた基礎研究の成果は誰かが実際問題に応用してくれるはずで、必ず役に立つはずでした。また、学生の教育には不可欠の道筋でした。この考えは決して間違いではなく今でも期待しているところですが、財団にお世話になってから半年、基礎研究と現場での取り組みの間に大きな乖離・落差があることをあらためて知らされました。基礎研究は、問題の枝葉部分を切り落としてなるべく単純化し、条件をコントロールして関連する要因を少数に絞り、結果の現象や効果と支配要因の関係を明示化します。多くの基礎研究はこれ止まりで、さーご利用くださいというわけです。

一方、現場の技術は逆の道をたどることが必要です。現場の置かれている状況は複雑であり、いくつもの要因が重なっているのが普通で、その一つひとつに基礎的知見を適用し総合化していくことがせまられます。しかし、現場技術者が基礎研究成果を利用するには大きな困難があるようです。問題解決のためにどのような知見を持ちよるべきかが分からない、あるいは難しく書かれていて適用の切り口が分からないというだけでなく、そもそもどこにどのような成果があるかが分からないという状況があるようです。文献サーベイなどの時間をとることも難しいとなると、経験や類似の事例を手がかりに解決策を追及することになります。これは、現場で閉じた独自の世界を作り出しているように見えます。大学の研究のほうも、より抽象性の高い体系だった研究に邁進しがち(そのほうが評価が高いので)で、こちらでも独自の世界を作り出しています。

また、道具立ての高度化という問題もあります。基礎的な研究成果をなるべく使いやすくするように、これまでも結果を簡便式や図・表にするなどの努力が払われてきました。難しい途中経過を経なくても現場で簡単な見積もりが出来

るようにするためです。しかし、このような簡易な道具だてが、今日ではプログラムソフトなどにどんどん置き換えられています。等流見積もりから不等流見積もりへ、さらには不定流評価へ、1次元解析から2次元、3次元解析へと技術課題が高度になるに従って結果の簡便な表記が難しくなり、かわってプログラムソフトによる道具立てが不可欠になっています。しかし、ソフトを使いこなせる技術者とそうでない技術者(コンピュータア?)が現れて、誰もが簡易にとはいかない状況が生じています。



基礎研究と現場技術のギャップを埋めることはそう簡単なことではなく、個人の努力で解決するものではないようです。研修教育や交流、この課題自身に対する研究など、より組織立った取り組みが不可欠であり、当財団こそその役割を担うべきこと、現に成果をあげてきたことをあらためて認識しています。特に、「河川整備基金助成事業」の調査・試験・研究部門では、大学・高専の研究者に対し河川整備へむけた個々の研究の応用を期待・要請しており、研究者が現場の河川に向き合う非常に重要な契機を提供しています。ただし、現在のところ自身の得意な研究に軸足を置いて、冒頭と結びでだけ課題テーマとの関連を述べるという研究が目立つようです。河川現場の大きな課題を正面にすえた優れた研究、研究者が現場側に近づいて技術発展をはかる研究を増やすためには、現場における長期的、短期的重要課題を研究者側に魅力的に提示することが必要だと考えます。また、現場技術者が最新の研究成果に容易に近づくことが出来るようにするために、問題別に編集した研究成果リストや事例解答集などの出版、充実が望まれます。

財団法人 河川環境管理財団 研究顧問

は せ がわ かず よし
長 谷 川 和 義

挨拶

この度、当財団の顧問を委嘱されました清治です。河川環境管理財団ニュースの紙面をお借りして、ご挨拶申し上げます。7月に国土交通省を退官しましたが、公務員生活の35年、その多くを河川行政に携わってまいりました。人生の大きな転機を迎えて、これまでの公私を通じた河川空間との付き合いを振り返ってみました。

遊びや冒険の場、学びの対象、仕事の課題、風景・景観としての評価、憩いや癒しの空間等々多岐にわたり、その内容も時代(年齢)とともに変化しました。出身の田舎と居住する都市でも大きな違いを感じています。

近年では、運動不足解消と見聞を広める目論見で律儀にも続けているウォーキングに格好のお相手です。単身赴任の名古屋時代、寄る年波を考えて不本意ながらジョギングを、それまで軟弱奇異と思っていた「歩き」に切り替えたのが始まりです。しかし今では、雑学を肥やす歴史街道めぐりや職務に役立つ河川巡視、美しい国土を愛でる四季の体感、そのいずれにも歩きの移動感が最適だと実感しています。幸い、同好(行)の士にも恵まれ、月2回くらいのペースで企画し敢行、そして夕刻のリカバリー会もセットで楽しんでいます。休日の一日を費やすことになりましたが、いずれ余儀なくされる高齢化スローライフへの理想的な参入プロセスと、自分なりに割り切っています。

歩きながら連続して眺めると、休日の都市の川に繰り出す人々の多さには改めて感心しています。スポーツや健康維持、イベントや地域コミュニティ、釣りや昆虫採集、開放感や安らぎの静寂等々、目的や求めるものは多種多様です。老若男女、日常・非日常、行楽・実業を問わず、このような「人と川との関わり」をこれからも大切にしていかなければなりません。その前提として、川の環境は流域や地域を写す鏡であること、地形や流れには危険性が内在していることなどをもっと良く知ってもらいたいと思います。

谷川、里川、河口など様々な顔を持ち、四季に変化し、様々な動植物を育み、そして人や地域との豊かな関係を紡ぎ続ける河川環境の管理の仕事に関われることに感謝しています。自分の今までの体験、知見、これからの希望や理想などを当財団の公益事業に活かすことができるように、皆様と一緒に考え努力していきたいと思います。宜しくお願い致します。



財団法人 河川環境管理財団 顧問

せいじ まさと
清治 真人

財団の体制

理事	長	鈴木 藤 一 郎
専務理事	事	小林 正 典
常務理事	事	池田 東 雄
理事	事	花見 忱 一
顧問	問	宮尾 博 一
名誉顧問	問	清治 真 人
名誉顧問	問	吉川 秀 夫
研究顧問	問	芦田 和 男
研究顧問	問	村本 嘉 雄
研究顧問	問	高木 不 折
研究顧問	問	井上 和 也
研究顧問	問	長谷川 和 義
河川環境総合研究所長		山本 晃 一
技術参与		佐藤 和 明

総務部長	葛西 隆
企画調整部長	入江 靖
研究第1部長	鎌田 照 章
研究第2部長	阿部 徹 豊
研究第3部長	小林 英 雄
研究第4部長	戸谷 英 雄
大阪研究所長(兼)	井上 和 也
研究第5部長(大阪研究部長)	持田 亮 一
子どもの水辺サポートセンター長(兼)	宮尾 博 一
東京事務所長(兼)	戸谷 英 雄
北海道事務所長	鈴木 俊 行
名古屋事務所長	間柄 仁 一
大阪事務所長	田村 公 一

特集 1

水辺で安全に活動するために

1.はじめに

今年の夏も川や海での水難事故の報道が目立ちました。その中でも、河川上流域での集中豪雨によって、短時間に水位が上昇し事故にあったケースが目立ちました。新聞報道によると、6月～8月の水難事故による死者・不明者は391人で、前年同期より12人減となっていますが、中学生以下の死者は前年より4人多い52人となっています。また、今年は梅雨明けが遅かったため7月の死者・不明者は前年より27人少く、逆に8月は15人の増となっています。

ここでは、過去の水難事故の傾向と、水辺で安全に活動するために是非とも知っておいていただきたいことを紹介します。

2.水難事故の傾向
(平成15年～17年の事故報道から)

1) 時間帯別の水難事故発生状況

最も多く発生している時間帯は15時～16時であり、15時台をピークとして、13時～17時までの4時間に全体の過半数の事故が集中しています。

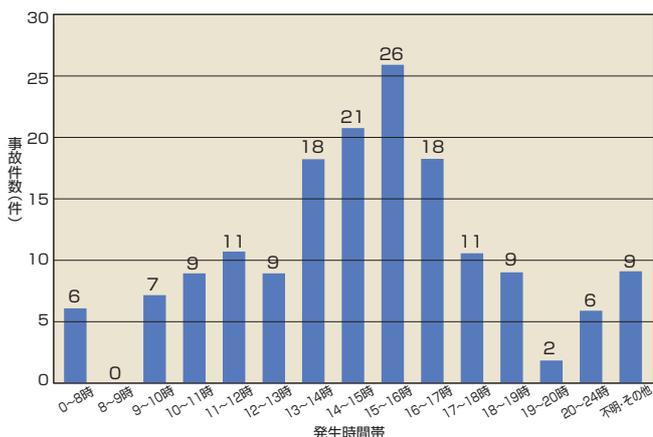


図-1 時間帯別水難事故件数

2) 上中下流別の水難事故発生状況

平瀬・早瀬・淵といった流れの変化があり、流速や水深も一様ではない「中流域」での事故が全体の45%を占め、次いで「上流域」が15%、「下流域」が14%、「中～下流域」

が8%の順となっています。「中～下流域」や「下流域」の事故では、堰による湛水域への転落、増水時の中洲での孤立が特徴となっています。

また、流況を把握できた事故のうち、「増水時」と「やや増水時」の事故が過半数を占めており、出水による流れの変化が水難事故の要因の一つとなっています。

3) 年代区分別の水難事故発生状況

成人が被災した事故が全体の53%を占めており、次いで小学生16%、中学生13%、高齢者5%、幼児5%となっています。幼児から高校生までの事故を合計すると、全体の37%を占め、水難事故に占める「子どもの事故」の比率は比較的高いと言えます。

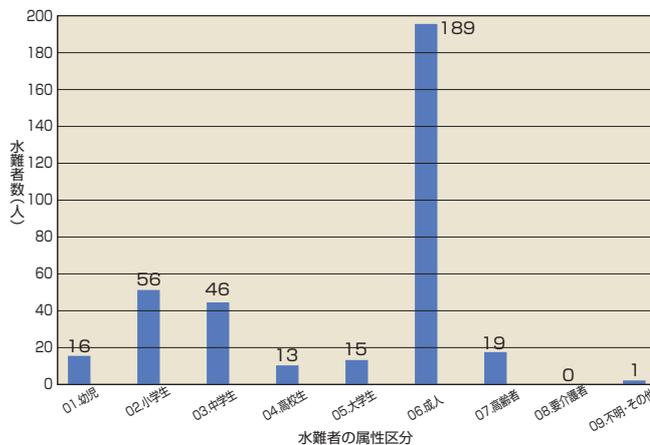


図-2 年代区分別水難事故者数

4) 行動区分別の水難事故発生状況

「遊泳」が最も多く23%を占め、「子どもだけの川遊び」と「大人同伴の川遊び」がそれぞれ11%、「ボート・カヌーなどのレジャー」が10%、「釣り・遊漁」が9%となっています。事故発生件数の多い上位の行動は、川の中に入ることをあらかじめ想定している行動と思われるが、結果的に川に内在する危険を予見できなかったり回避できなかったために事故に至っていると思われます。

二次災害は、全体の13%を占め、「大人同伴の川遊び」や「遊泳」などの事故において、溺れた同行者を救おうとする救助行動中の発生も多いです。

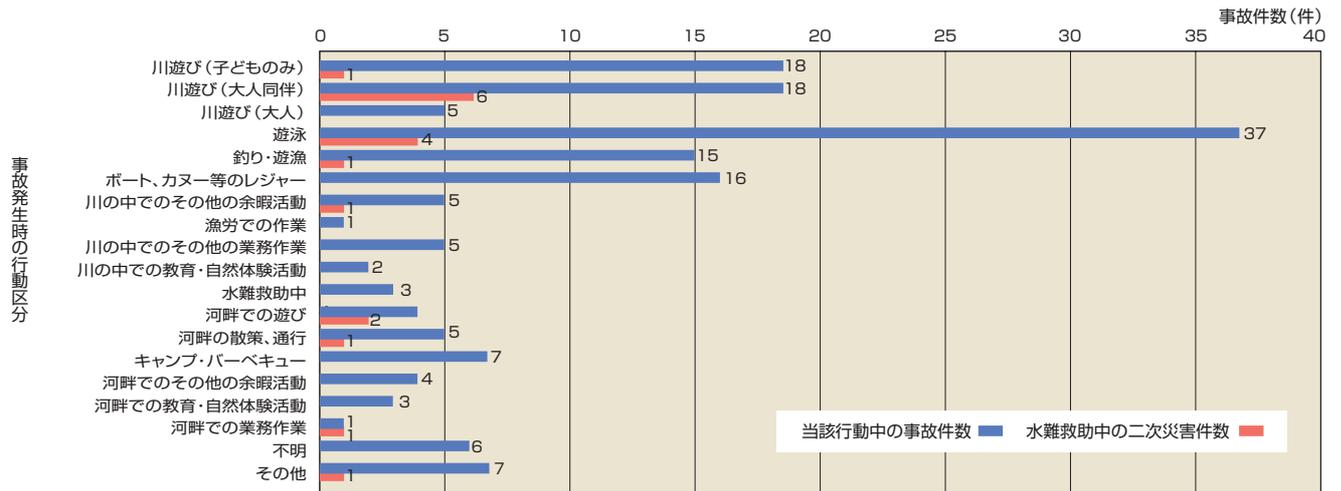


図-3 行動区分別水難事故件数

3.水辺で安全に活動するために

1) 河川や水辺に出かける前に心がけること

- ①出かける日程が決まったら、まず気象情報を集め期間中の天候状況を把握する。悪天候が予測できたら、計画を変更することも考えましょう。
- ②出かける先の地形、河川の特徴などを調べておきましょう。流域の形状により上流の降雨で急激な水位の上昇が起こる場合があります。現地を知っておくことがとっさの時に役に立ちます。
- ③服装や携帯する装備も非常に重要です。服装で心がけたいのは濡れにくく速乾性のあるポリエステルなどの素材のものがよいでしょう。装備では傷薬や包帯・絆創膏など医薬品や医療品などを入れたファーストエイドキットを用意し、防水パックに入れて持参しましょう。
- ④是非用意しておきたい装備がライフジャケットです。川ではありませんが、海上保安庁がまとめた平成14年までの過去5年間の統計によると、海中転落を伴う海難のうち、ライフジャケットを着ていた人の生存率は82%、着ていなかった人の生存率は21%だそうです。ライフジャケットを着用した水辺の活動例
ライフジャケット着用は事故回避の最低条件です。
- ⑤もう一つ用意しておきたい装備がスローロープ(スローバグ)です。これは水に落ちた人に投げて掴まってもらい



岸や船などに引き寄せられるものです。救助者が安全な位置から救助活動を行えるので非常に有効な装備です。

- ⑥もしもに備えて、現地の消防署や警察の連絡先を調べておきましょう。携帯電話で119番や110番に電話しても地元の管轄署まで連絡が届くのが時間がかかってしまうことがあります。

2) 出かけてからの心構え

- ①現地に着いたら周りの地形や川の地形を調べましょう。植生のない川原は増水すれば水に浸かる場所。こういう場所は中洲と同様テントを張ってはいけません。
- ②上流にダムがある河川では下流にサイレンなどのダム放流の警報装置が設置されています。その存在を確認しておきましょう。
- ③増水して川が危険になる前には、ダム放流の警報や管理所職員から、場合によって消防署・警察署からも待避等の呼びかけがあります。必ず従って行動しましょう。
- ④国土交通省ではインターネットや携帯電話iモードで降雨状況や河川の水位状況が検索できるようにしています。10分単位で更新されるので、新しい情報を把握しましょう。アドレスは<http://www.river.go.jp/>
iモードは<http://i.river.go.jp/>

3) 国土交通省及び河川環境管理財団では川遊びに役立つ情報を下記ホームページに掲載しています。

- ①川であそぼう <http://www.kawaasobi.jp/>
- ②水辺の安全ハンドブック 川を知る。川を楽しむ。
http://www.kasen.or.jp/public_html/index.html
- ③初めての川遊び～川で楽しく安全に遊ぶために～
<http://www.kasen.or.jp/kawaasobi/flame.htm>

特集 2

河川公園の活用について

昭和39年に開催された東京オリンピックを契機として、日本国民の体力増強に関する機運が高まり、同年、「国民の健康、体力増強対策について」が政府により閣議決定されました。その決定を受け、大都市周辺の河川敷地を利用して、国民一般が家族連れで日常気軽に体力づくりの運動に親しめるような「国民広場」を設置することとなり、国により昭和52年には淀川（大阪府）に、昭和62年には木曾川（愛知県・岐阜県・三重県）の河川敷地に運動公園が整備されました。

当財団は、これらの国営公園と当財団が整備した豊平川・荒川・多摩川・庄内川の河川公園及び地方公共団体の河川公園並びに公園に付随する施設の管理・運営を行っています。本稿では、トピックスを交え、主な河川公園の利活用状況についてご紹介します。

1. 国営淀川河川公園（大阪府）

国営淀川河川公園は、日本最初の国営河川公園です。現在の開園面積は約225ha。年間約500万人の人々に利用されています。スポーツ施設の利用だけでなく、ジョギング、散歩、鼓笛隊の練習、運動会など、大都会の貴重なオアシスとして多種多様に利用されています。

1) 幼稚園児が疾走: 幼稚園児の卒園記念マラソン

この公園の最上流端、木津川、宇治川、桂川の三川が合流する地点に景観保全地区指定の背割堤



卒園マラソン（表紙掲載写真）

があります。ここで、2月の終わり頃に幼稚園児たちが疾走します。八幡市の「なるみ幼稚園“卒園記念マラソン”」です。園長さんにお聞きました。「今年で27回目で、背割堤をコースにしたのは8年前からです。その前は道路を走っていたんですが、信号では足踏みをして待たないといけないし、役員の方に立ってもらっていてもやはりハラハラ、心配がありました。ここなら安心です。車が来ないし、駐車場はあるし、

保護者の皆さんが自由に応援できるしホントに良かったです。公園は見通しが良く、危険物もなくよく管理されているし、散歩にきた人たちの声援を受けたりしています。この桜が咲く頃は1年生だねとか話している家族の楽しそうな会話も聞けるなど、ここで開催できることに大変感謝しています。」

この背割堤は、桜の名所として知られています。堤防沿い1.4kmにわたってソメイヨシノ約250本が並木を作っています。「八幡さくらまつり」の間中は多くの花見客が訪れます。今年は、期間中約15万人の来園者がありました。その他ここではバーベキュー利用者も多く、GWを筆頭に、天気の良い日なら真冬を除き来園者が絶えません。野鳥も多いのでバードウォッチングを始め、草木、風景、自然の撮影に多くのアマチュアカメラマンも訪れています。

2) 監督が宙に舞う: 河川環境管理財団杯争奪サンスポ野球大会

この公園には15地区に野球場が点在しています。土日、祝日の利用申込みが集中するため、毎月16日に翌月分の抽選を行います。抽選会場は多くの希望者であふれかえります。例えば、8月16日の海老江地区の抽選では、申込者が300組以上にのぼり、当選確率は30%でした。最近、晩秋でも利用希望が多く、抽選なしでいけるのは厳冬期だけです。

地区、職場、学校、同好会様々な野球の大会がありますが、その中で燦然と実績を誇り、沢山の野球人に支持されているのが当財団大阪事務所が主催する春秋の野球大会です。今年で春の大会は第28回、募集は256チーム、毎年応募数も多く抽選します。秋の大会は第33回で、今年は「国営公園制度30周年」の記念大会として、9月17日から熱戦を繰り広げます。先頃募集を締め切ったところ、募集184チームに対し、応募数は217チームでした。抽選で落選したチームに連絡をするの

は辛いことです。甲子園の高校野球ほどではありませんが、春秋の野球大会の様子は、1回戦からす



優勝に喜ぶ新橋覇香の選手

べてサンケイスポーツに掲載され、関西全県で販売されています。優勝チーム監督の胴上げシーンはもとより、監督や選手へのインタビューも載ります。これも参加者にとっては大きな喜びです。

なお、春の野球大会の楽しみは、何と言っても優勝チームが西日本代表として出場する東西決戦です。例年関東で開かれ、今年は7月22日に所沢のインボイスSEIBドームで、東日本代表の「朝日信用金庫」と西日本代表の「新橋ジャコウ」との間で対戦が行われました。9回でも勝負がつかず、延長戦で新橋ジャコウが21年ぶり2回目の日本一の座に輝き、参加430チームの頂点にたちました。勝った新橋ジャコウの監督は宙に舞って感涙にむせび、負けた朝日信用金庫は来年への雪辱を期していました。

3) 豊かな自然を楽しむ: 淀川での自然体験学習

淀川の貴重な生態を観察する「淀川の自然を楽しむ会」も体験型学習として根強い人気があり、今回で80回目を迎えました。8月26日に「干潟で楽しもう」のテーマで十三野草地区で実施されました。募集100名に対して応募者が133名。



自然体験学習(淀川の自然を楽しむ会)

干潟でシジミやカニ採り、投網による魚採りをし、チヌ、ボラ、ウナギ、アユモドキ等約10種類の収穫がありました。夏休み最後の土曜日ということで、親子連れが多く、年配のご夫婦もちらほら、初めて参加されたかたが大半をしめ、おはしやぎでシジミ採りに熱中するなど大好評でした。

これからもイベント等様々な利用を通じ、多くの人々に愛される淀川河川公園であるように、職員一同、一所懸命に管理をして行きたいと思えます。

2. 国営木曾三川公園 (愛知県、岐阜県、三重県)

国営木曾三川公園は、計画面積が約1万haに及ぶ我が国最大の国営公園で、木曾川、長良川、揖斐川の有する広大なオープンスペースと良好な河川環境、数多くの歴史的遺産を活用する公園です。この公園の運営目的は、木

曾三川が有する川の豊かな自然と文化、それを生かした広域レクリエーションの場としての利用促進、誰もが親しみ参加できる活動の場としての利用促進を行うこととし、年間を通じ各種の行事を実施しています。



春先の中央水郷地区

1) 我が国最大の国営公園は入場者も一番

この公園で行われる多様なイベントには、行政機関等で構成される、国営木曾三川公園整備運営協議会が主催、共催、あるいは実行委員会組織を整えて実施するイベントと、利用者が主体となり公園施設を利用して実施するイベントとがあります。主なものは、元旦の「日本一早い花火大会」をはじめ、長良川の水面、河川敷などを利用して行う「長良川国際トライアスロン大会」、広大な木曾川の高水敷に整備された東海広場を利用した42.195kmの「チームリレーマラソン」、木曾川にある全国でもまれな河畔砂丘を活用して「砂の造形展」や「ビーチスポーツ」など多様な行事があり、これらのイベントに昨年度は約288万人の利用者がありました。その他、公園への一般入場者、利用者が主催する様々なイベント等への参加者の合計は約467万人で、総入場者数は755万人にのぼっています。これは全国の国営公園の入場者数の中で第1位であり、その27%を占めています。



木曾川の河畔砂丘で開催された「砂の造形展」

2) FISA世界ボート選手権大会、アジアで初めて開催

この公園の特色として、長良川河口堰上流の静水面が、レガッタやカヌーなどのウォータースポーツレクリエーションの場として利用されていることがあげられます。ウォータースポーツに対する沿川住民の愛着と、コースのすばらしさから、

昨年は8月末から9月初めにかけて、FISA世界ボート選手権大会がアジアで初めて開催されるという栄誉に浴しました。この大会には世界の約60ヶ国から選手・役員約1,400人が参加し、オリンピックを上回る規模で開催されました。直線二千メートルの10レーンがとれる世界有数のコースとして、参加した各国の選手・役員等からも好評を得たところです。



FISA 世界ボート選手権大会

3) 洪水をうける河川公園

河川敷の公園は、治水に支障のないような施設整備、利用形態が求められ、また、出水時には洪水の疎通の障害にならないよう撤去が義務づけられている施設もあり、その管理には神経を使うところですが、豊かな河川空間、水辺環境を楽しむ人たちが、愛知、岐阜、三重の東海三県をはじめ、全国各地から訪れ、河川を舞台とする公園のすばらしさ、雄大さに触れられ、かけがえのないレクリエーションの場として今後とも多くの人々に愛されるように管理を行っていくことが当財団の使命と考えています。

3. 豊平川・雁来健康公園（北海道）

雁来健康公園は、札幌市の都市計画公園施設として、ゴルフ練習場及びテニスコートとともに昭和60年4月にオー

プンし、当財団北海道事務所が運営管理しているものです。平成7年9月にゴルフショートコース9ホールが増設され、今年年間6万3千人余の利用者が集い、健康公園の名にふさわしいゾーンとなっています。



ゴルフ場（ショートコース）

1) 朝野球大会が閉幕

第88回夏の全国高等学校野球大会では、73年ぶりの3連覇を目指した駒沢苫小牧高校が、惜しくも準優勝に終わりましたが、北国のチームが3年連続の決勝進出はまさに快挙であり、また、延長再試合という決勝戦は歴史に残る一戦となりました。

その一方で、豊平川の雁来健康公園野球場2面を利用して、「第33回ほくせんカップ日刊スポーツ旗争奪朝野球大会」の熱戦が繰り広げられました。5月7日に93チームによりスタートしたトーナメント戦は、9月20日に決勝戦が行われ、「いちざわクリーニング」チームが初優勝の栄誉に輝きました。



朝野球大会

4. 当財団が管理する河川公園

河川(公園)名	開園	面積	施設	入場者数	備考
淀川河川公園(国営)	1977年	226ha	野球場36面、テニスコート55面、陸上競技場7面、サッカー場9面、ゲートボール場8面、公園広場、他	約500万人	大阪府7市2町
国営木曽川三川公園	1987年	225ha	自然公園、展望タワー、展示館、自由広場、他	約800万人	愛知岐阜三重3県11市3町
江戸川、吉川地区江戸川運動公園	1987年	11ha	野球場9面、公園緑地、他	約2万人	埼玉県吉川市他
豊平川、雁来健康公園	1985年	13ha	自由広場、野球場2面、ゲートボール場2面、テニスコート6面、ゴルフ場9ホール、ゴルフ練習場、他	約6万人	北海道札幌市
荒川、扇運動公園	1980年	6ha	自由広場、野球場1面、テニスコート4面、ゴルフ練習場、他	約6万人	東京都足立区
多摩川	1978年	17ha	野球場3面、ゴルフ場9ホール、他	約9万人	神奈川県川崎市
庄内川、幸心健康公園	1990年	9ha	多目的広場、児童広場、ソフトボール場1面、ゴルフ練習場、他	約7万人	愛知県名古屋

報告事項 1 (調査・研究等)

1. 「湖沼水質のための流域対策の基本的考え方」まとまる

湖沼の水質については、平成16年度の環境基準達成率が50.9%にとどまるなど改善が進んでいないことから、公共用水域のさらなる水質改善に向け、湖沼水質保全特別措置法（通称：湖沼法）改正案が平成17年6月に成立しました。湖沼の水質の保全を図るため、改正湖沼法では、市街地や農地等からの面的に分布する汚濁物質が水域へと流れ出す非特定汚染源汚濁負荷対策の強化等の措置を講じることとされており、関係する行政機関が連携して非特定汚染源負荷対策の更なる充実を図ることが求められています。

このような状況を踏まえて設置された学識経験者等からなる「湖沼水質のための流域対策検討会」（委員長 福島武彦・筑波大学大学院教授、事務局：当財団）で、国土交通省、農林水産省、林野庁が連携して湖沼の水質保全を図るために、森林、市街地、農地など面源負荷に関する調査分析を行うとともに、非特定汚染源負荷の削減対策に関する検討が行われ、「湖沼水質のための流域対策の基本的考え方～非特定汚染源からの負荷対策～」がとりまとめられました。この中で、湖沼等の水質保全のための非特定汚染源負荷対策について、関連する行政機関が連携して、市街地、農地、森林等の面源負荷に関する調査・分析、対策の立案や実施の際に活用できるよう基本的考え方、留意点が整理されています。

（担当：研究第2部）

2. 住民参加による河川管理を目指した「河川レンジャー制度」の取り組みについて

淀川流域では、淀川水系流域委員会の提言を踏まえ、平成15年度より「河川レンジャー」制度の検討・試行を進め



河川レンジャーの位置づけ

ています。

河川レンジャーとは、住民と行政が連携して河川管理を行うことを目指し、地域と行政の間に立って、行政が責任を果たさなければならないもの以外で、危険を伴わない河川管理上の役割を担う人や団体のことをいいます。川との係わりが深く、川に関する様々な取り組みの主導的な立場にあって、住民と行政をコーディネートできる地域の情報や知識に詳しい人を河川レンジャーとして任命し、その河川レンジャー自らの意志と責任のもとで、個性や特性を活かした住民参加活動の企画・運営を通じ、地域と河川との良好な関係のあり方を構築しようとするものです。

現在15名の河川レンジャーが任命され、その活動は、河川環境に目を向けたもの、局所的な豪雨災害が頻発し防災への関心の高まりから水防講習活動など、それぞれの地域の状況、レンジャーの個性を活かした活動が展開されています。その中から、二つの活動を紹介します。

1) 京都伏見ジュニア河川レンジャー

まちづくり活動出身の河川レンジャーが、地域の小学校・観光協会、河川管理者等と調整を行い、体験学習による河川への啓発、川の人材育成等を目的に企画したもので、総合学習のカリキュラムを利用して、船で川の中からの観察、岸辺から川を観察しながらの清掃活動、町の歴史・町に流れる川についての講話を聞きました。



十石舟に乗り川や町などを観察

2) 水防工法体験会

生涯学習出身の河川レンジャーが、地域の中学校、水防工法を指導する講師、河川管理者と調整を行い、淀川河川敷で講師による水防の必要性などの講話を聞いた後、講師指導のもと土のう作り、積み土のうなど、水防の基礎工法を学ぶ講習会を実施しました。



水防工法体験(土のう作り)

(担当:大阪事務所)

行いました。なお、「全国主要閘門のパネル展」も同時に開催されました。



座談会の様子

【座談会出席者 敬称略】

久保田 稔:総合司会(木曾川文化研究会代表 大同工業大学名誉教授)
 遠見 清二:旧最上川・北上運河「石井閘門」から(宮城県石巻市:北上川・運河交流館 川の案内人)
 野尻 靖:荒川水系芝川「見沼通船掘」から(さいたま市教育委員会・文化財保護課)
 松本 啓造:神通川・富岩運河「中島閘門・牛島閘門」から(富山市、運河のまちを愛する会副会長)
 中村 稔:木曾川「船頭平閘門」から(司会進行、愛西市福原:船頭平閘門管理所)
 諸戸 靖:船頭平閘門と関わりの深い「輪中の郷」長島町から(桑名市職員)
 横井 照男:地元を代表して(愛西市福原新田自治会長)
 関沢 元治:河川管理者として(木曾川下流河川事務所長)

(担当:名古屋事務所)

3. 郷土の文化財を活用した地域づくり 座談会:「川をつなく道「閘門」が開かれました。

木曾川と長良川を結ぶ「船頭平閘門」(平成12年に国の重要文化財に指定)は、木曾川の河



船頭平閘門

口から12km付近(愛知県愛西市船頭平地先)にあり、今も使われています。その管理は当財団が木曾川下流河川事務所から受託しています。

明治の河川改修により木曾三川が各々独立した川となったため、当時盛んだった舟運は、隣の川へは河口を回らなくてはならなくなり、著しく不便なものとなりました。そこで、地域の有志が国会に閘門の建設を請願し1902年(明治3年)に完成をみたものです。

重要文化財の指定から7年目を機に、平成18年8月6日、閘門にかかわる人たちを招き、全国で初めて閘門をテーマにした座談会が開催されました。「船頭平閘門」を多くの人に知ってもらい、地域にある「先人の遺産」を単に「文化財」だけでなく、地域の人々が「誇りに思う施設」「集う施設」にするには、どのような活動が必要かなど情報交換を

4. 霞ヶ浦自然再生協議会

7月8日(日)に、茨城県霞ヶ浦環境科学センターで、第10回霞ヶ浦自然再生協議会が開催されました。

霞ヶ浦では、昔の湖岸帯再生を図るため、霞ヶ浦(西浦)の田村・沖宿・戸崎地区の沿岸(土浦市、かすみがうら市)を対象に協議を重ね、昨年度末には、当地区の自然再生の方向性を示すための全体構想が策定されました。本年度は、全体構想に基づいた整備実施計画を検討し、いよいよ自然再生に向けて工事を開始する予定です。

今回の協議会においては、全区間のうち水際が矢



協議会の様子

板で囲まれた区画について、水域と連続性のある区画に整備することを目的とした実施計画案が提案され、協議会委員である国土交通省が主体となって行う工事内容や、一般公募委員の方々が行う作業等について活発な意見が出されました。

今回出された意見等をもとに、次回協議会では実施計画をとりまとめ、実施工の段階へと移っていく予定です。

(担当:研究第4部)

5.都市空間における未活用水の有効利用方策のパンフレットを作成しました

「水」は人間にとって必要不可欠なものであり、生活の中で利用されるだけではなく、人間に潤いとやすらぎを与える存在です。かつては豊富な地下水や湧水のもと、都市においても多くの水辺が存在しましたが、土地の効率的利用を優先したまちづくりが進められ、水辺は大きく減少しました。



パンフレット表紙

今後のまちづくりにおいては、豊かな生活環境の保全・創

出が求められており、水循環機能の回復を図ることによって都市の水辺を保全・再生・創出することは重要であり、そのためには水源を確保する必要があります。地下街や地下鉄などの地下構造物への湧出水、下水再生水など現在有効に活用されていないこれらの未活用水を有効に利用し、水辺を保全・再生・創出し、利用者のマナー向上と合わせて、適切に維持管理していくことが望まれます。

このパンフレットは、水質が良好であるにもかかわらず、有効に利用されることなく下水道や河川などに排水されている都市における未活用水を有効利用している施設の事例を紹介したものです。 (担当:研究第2部)

6.川の写真コンクール入賞者が決定

第26回川の写真コンクールの審査会が9月26日(火)に行われ、厳選な審査により小中高等学校各部門の入賞者、金賞各1名、銀賞各3名、銅賞各5名、努力賞各20名、特別賞各3名が決定しました。今年度の作品応募総数は、7,248点です。多くの素晴らしい作品のご応募ありがとうございました。

なお、作品展示会は下記の日程で行いますので、皆さん是非ご覧ください。

場所:東京八重洲地下街(メイン・アベニュー)

期間:11月12日(日)～17日(金)

小学校の部 金賞



「きもちいいーっ」
藤井智之 (茨城県石岡市立府中小学校3年)

中学校の部

金賞



「手が四本～!!(寒い)」
元原祥太
(静岡県長泉町立長泉中学校3年)

高等学校の部

金賞



「ナナちゃんの夏」
森田彩花
(埼玉県立坂戸西高等学校3年)

(担当:東京事務所)

7.平成18年度 GGG緑化事業について

社団法人ゴルファーの緑化促進協力会の協力金による河川の美化・緑化事業（通称「GGG緑化事業」）は、河川区域に係るゴルフ場を利用したゴルファーの方々からの醸出金を原資にして、昭和60年度から行っているものです。

平成18年度は、約3,300万円の予算で北海道から九州まで、全国の河川において植樹等の緑化事業と河川美化緑化に関する調査研究助成を行う予定です。

（担当:企画調整部）



植樹された桜



植樹の看板

報告事項 2 (河川環境学習関係)

1.プロジェクトWET実施報告

プロジェクトWETは、「Water Education for Teachers: 教師のための水に関する教育プロジェクト」の略であり、教育活動を通じて、水や水資源に対する認識・知識・理解を深め責任感を促すことを目標として開発された「水」に関する教育プログラムです。なお、ここでいう教師とは学校の先生に限りません。教師が一方的に知識を与えるのではなく、子どもたち自身がアクティビティ(活動)を実践しながら、「水」そのものや、その大切さや重要性を考え、学んでいきます。

プロジェクトWETは、1984年米国ノースダコタ州立水環境委員会によってつくられたもので、世界各地からも関心が集まり、現在ではカナダ・メキシコ・フィリピン・パラオ・トーゴなどでも実施されています。日本では2004年に当財団がプロジェクトWETジャパンの事務局として使用権を取得し、普及・啓発活動を行っています。

今年も子供たちの夏休みに合わせ、次の会場で実践しましたので報告いたします。

1) 第14回日本ジャンボリー

8月4日～7日に開催され、約2万人が参加した(財)ボーイスカウト日本連盟主催の「第14回日本ジャンボリー(石川県珠洲市)」で、各種環境学習の選択プログラムの一つとしてプロジェクトWETを実施しました。

ペットボトルに草を入れ、一晚寝かせて朝露を集め、植物の中の水について説明するなど、屋外で行う利点を活かし

た水に関するアクティビティを、ボランティアで参加してくれた多数のエducーターの方と共同で行いました。

連日の猛暑の中でも子ども達は生き生きと各種のプログラムに参加し、さすがに普段からボーイスカウトの活動で鍛えられている子どもたちだと関心しました。



アクティビティ「驚異の旅」

2) 子ども霞ヶ関見学デー

子ども霞ヶ関見学デーは、文部科学省が主唱している「子どもと話そう全国キャンペーン」の一環で、子供たちが夏休み中に広く社会を知る体験活動の場として、また、中央省



アクティビティ「ブループラネット」

庁等の仕組みや施策に対する理解を深めてもらうことを目的に各府省庁等が連携して実施しているものです。

国土交通省が8月23日と24日に開催した、「みんなで見つけよう!川や水のひみつ」のコーナーで、プロジェクトWETを実施しました。

川や水についてより関心を持ってもらえるようなプログラムをつくり、地球規模の水循環のしくみや、河川等の水質保全について学ぶアクティビティを親子で体験してもらいました。(担当:研究第1部)

2.第3回「身近な水環境の全国一斉調査」の集計結果について

当ニュースNo.24にて紹介しました、第3回「身近な水環境の全国一斉調査」(H18.6.4(日))を中心日として実施)の調査地点数等の集計結果がまとまりましたので報告いたします。

■参加団体： 944 団体

(第1回：531 団体 第2回：1,000 団体)

■調査地点数：4,923 地点

(第1回：2,545 地点 第2回：5,018 地点)



調査風景(滋賀県琵琶湖)

前回と同様に、今回の調査についても全都道府県で実施され、屋久島、奄美大島、石垣島などの離島においても調査が実施されています。

今後は、年末を目途に全国の調査結果を地図上に示した「水環境マップ」を作成し、全国の調査参加団体等と情報の共有化を図る予定です。

今後も全国一斉調査の継続により水環境の保全などに関する市民の関心が高まり、地域の河川を中心とした活動に発展するなど、その展開が期待されます。

「身近な水環境の全国一斉調査」の詳細はこちらをご覧ください。<http://www.japan-mizumap.org/>

(担当：研究第1部)

3.第4回 集まれ!水夢きっず 夢実現について

「集まれ!水夢きっず」は、小中学校の子どもたちが水辺でやってみたいこと【夢部門】、先生や市民団体等の方が子どもたちにさせてみたいこと【企画部門】を募集し、大賞になった“水夢きっず賞”のアイデア(夢)について、子どもの水辺サポートセンターが、その夢の実現をお手伝いするものです。

今回、第4回目となる「集まれ!水夢きっず」(募集期間：平成18年3月中旬～6月9日)では、73件の応募があり、みごと“水夢きっず賞”を受賞した2つの夢について紹介します。

1) 夢部門

この夢は、岐阜県多治見市の安藤絢音さん(小学校5年生)の、「川を下って海へ行こう!!」が「水夢きっず賞(夢部門)」を受賞したもので、自宅近くを流れる土岐川を地図帳でたどってみたら、愛知県に入ると庄内川になり、最後は名古屋港に流れるということを知り、舟に乗り河口まで下っていけるのか体験してみたいというものです。



安全講座の様子

夢の実現は、土岐川からでは河口まで非常に距離があり、また途中堰などの構造物があるため、名古屋港から約15キロ地点の清須市庄内川水防センターを出発地点とし、表彰式、安全講座を行ったあと、Eボート3艇による総勢27名で8月31日に実施しました。

ボートによる初めての川下りとあって子供たちは緊張した様子でしたが、いざ漕ぎ始めると、暑さを忘れ、小学生から保護者まで夢中になって川下りを楽しんでいました。流れがない河口部では船外機船の手助けを借りながらも河口の名古屋港までたどり着くことができました。また、川ナビボランティアによる庄川の自然環境等に関する丁寧なガイドを受け、様々な野鳥や魚と会うことができました。

参加者からは「一生に一度しかできないかもしれない貴重な経験ができ、非常に為になった」「将来はカヤック等で

下ってみたい」と言った感想があり、夏休み最後の良い思い出となった様子でした。是非これを機会に川遊びの楽しみ方等を他の子ども達に伝えていって欲しいと思います。



川下り出発直後

2) 企画部門

この企画は、岡山県赤磐市立軽部小学校岸本勝義先生の「ぼくたち、わたしたちの水上基地を作ろう」が、「水夢きっず賞(企画部門)」を受賞したもので、「最近では子どもたちが川で自由に遊べなくなった、年に1度くらいは川で思いっきり遊び、その中で川を知ることができたら」と願う岸本先生が、「今まで川でやったことのないことをしてみよう」と考え、水上に基地を作り、子どもたちが基地遊びをしたり、川流れを体験することで、机の上ではわからない、「川に行くからこそわかる発見」をさせようと応募し、ユニークな企画として選ばれたものです。



基地計画プラン



水上基地の完成

夢の実現は8月25日に実施し、表彰式やライフジャケットを着用した安全講座を行った後、子どもたちのアイデアで作った基地を、旭川・中原川合流点付近(一の荒手子どもの水辺)に浮かべ、基地からの飛び込み、学年別対抗レース、

川流れ等を行いました。

多くのスタッフや報道関係者等が囲むなか、子ども達は思い思いに川の上に浮かべられた基地で遊び、泳ぎ、漕ぎ、くたくたになるまで活動し、川遊びの楽しさだけでなく、川の特性、川の危険予防等を学ぶことができたようです。

(担当:研究第1部、子どもの水辺サポートセンター)

4.利根川で「子どもの水辺安全講座」を実施しました!

小学校における「総合的な学習の時間」の支援として、利根川中流域にある羽生市立村君小学校でEボート体験を含んだ「子どもの水辺安全講座」を実施しました。

まず、体育館で川の危険性や安全に活動するための装備等について説明し、その後、プールでライフジャケット(PFD)体験、スローロープ体験をしました。子どもたちは、川で活動



スローロープの使い方の説明

する際の危険性について認識しつつ、ライフジャケットの浮力を実感し、必要な装備を行えば、水辺での活動は安全で楽しいものであることを実感したようです。(6月28日実施)

また、実際に利根川で水辺体験活動をしました。子どもたち自らが組み立てた4艇のEボートに乗り



Eボート体験

込み、約2kmほど川くだりを体験するとともに、途中の砂州への上陸や、川流れ体験もしました。

子どもたちは普段あまり触れることのない利根川を、五感をフルに使って感じ、川の楽しさを満喫していました。また途中、ハクレンの大群に遭遇するなど、利根川の大きさ、自然の豊かさも体験できるなど、非常に素晴らしい一日となり、子どもたちの満面の笑顔を見ることが出来ました。(7月12日実施)

(担当:研究第1部)

5.太田川せせらぎ夢学習塾でEボート体験

7月30日、広島市内を流れる太田川放水路の子どもの水辺「こいっ子ふれあいの水辺」で、「第29回太田川せせらぎ夢学習塾」が市内の小学生49名、保護者など11名、スタッフ20名が参加して開催されました。

「太田川せせらぎ夢学習塾」では、これまでカヌー教室や干潟観察、ロケット教室、ひまわり・菜の花教室などが開かれてきましたが、今回は、水辺の体験活動を行うことにより育成される力を明らかにし、その評価方法を見いだそうという研究の一環としてEボート体験を実施しました。

当日は中国地方の梅雨明け発表と重なり、川面に強い日差しが照りつける中、子ども達はEボートが初めての体験とあって、夢中でパドルを操り満喫していました。



真夏の空のもと
Eボートをこぐ子ども達

(担当:研究第1部、子どもの水辺サポートセンター)

河川整備基金コーナー

1.河川整備基金・自主事業 流木災害軽減対策と河川樹木管理に 関する総合的研究

河川区域に生育する樹木は、洪水流下能力の減少、流木化し氾濫被害の増加、また河床に堆積し航路通行の障害となるものとして否定的な側面が強調され、専ら伐採の対象とされてきましたが、近年は河川の環境機能が強調され、河川生態機能および景観機能の重要な要素として、また樹木の持つ治水機能(河岸侵食防止機能、水防林機能)としての価値が見直されつつあります。

一方で、近年の氾濫の多発において流木化した樹木が氾濫を拡大、あるいは被害を助長させる現象が見られ、流木災害の観点から河川近傍の樹木管理、災害軽減対策が求められています。

国民の河川機能に対する要求は、一方の機能を強調し

他方を押し下げるということではなく、どちらの機能についても向上を望むものであり、河川計画論としても、河川技術としても、河川および河川近傍の樹木の機能と災害拡大要因について、的確な把握と害的側面の軽減手法の開発を図る必要があります。

当財団では、このような背景のもとに水系一貫の観点から樹木の持つ河川環境機能を配慮しつつ、河川縦断方向セグメントごとの流木化機構、堆積機構の差異を明確にし、流木災害軽減対策について取りまとめ、河川整備に資することを目的として、九州大学の小松教授を委員長とした10名の学識者等から成る委員会を設置し、2か年計画で研究を行います。

6月に第一回、7月に第二回の研究会を開催し、各委員のこれまでの研究成果の発表や今後の方針について議論しました。8月には利根川上流ダム群と北上川水系における流木の現状と対策について現地調査を行いました。



陸揚げされた相俣ダムの流木(利根川支川赤谷川)



低水路の洲を開削した迂回水路に設けた流木補足工(北上川支川砂鉄川)

(担当:研究第4部)

お知らせ

1. 河川整備基金・自主事業 河川汽水域の水環境と生物環境に 関する研究成果発表会のご案内

河川整備基金による自主事業として、平成16年度から2年間にわたり、「河川汽水域の水環境と生物環境に関する研究」を実施してきました。この研究は、河川の汽水域において水塊の構造、堆積物と物質収支が生態系とどのようにつながっているかという観点から、水環境の特性を把握しつつ、生物環境への影響とそのメカニズムの解明に努め、健全な生態系の保全を目指した今後の汽水域管理に資するものです。

ここに、本研究成果を広く活用していただくため、下記により発表会を開催し、その成果を執筆者の方々に報告して頂くとともに、参加者の方々と討論を行い、この分野の調査研究の一層の進展を図ることと致しました。つきましては、関係各位多数のご参加をいただきたくご案内申し上げます。

■日時:平成18年12月8日(金) 13:30~17:30

■会場:星陵会館ホール
千代田区永田町2-16-2
TEL.03-3581-5650

■最寄駅:地下鉄 永田町駅(6番出口 徒歩3分)

■定員:300名

■主催:(財)河川環境管理財団

■問合せ先:

研究第2部次長 蓑

TEL.03-5847-8304 FAX.03-5847-8309

2. 平成18年度 水辺を活かした環境学習・体験学習に 関する全国事例研修会開催のご案内

「子どもの水辺サポートセンター」では、子どもたちの水辺での学習や自然体験活動を支えるために、地域の方々、教育関係者、河川管理者等による活動を支援しています。その一環として、小・中・高など各学校において総合的な学習の時間に実施されている事例を中心とした、「水辺を活かした環境学習・体験学習に関する全国事例研修会」を開催しており、今回第5回目を行うこととなりました。

研修会においては、総合学習での取り組み事例等についての発表を行うとともに、意見交換を行う場を設けたいと考えております。この研修会を通して、日頃感じている問題点や疑問点の解決策を見つけていただければと考えております。

ご多忙の時期かと思いますが、小・中・高など各学校の先生および広く水辺で活動されている皆様などのご参加をお待ち申し上げます。

■日時:平成19年1月24日(水) 10:00~17:00

■会場:砂防会館 別館1階大会議室
千代田区平河町2-7-5
TEL.03-3261-8386

■最寄駅:地下鉄 永田町駅(4番出口 徒歩1分)

■定員:250名

■主催:(財)河川環境管理財団

■後援:国土交通省、文部科学省、環境省、農林水産省

■問合せ先:

子どもの水辺サポートセンター 矢野・菅原

TEL.03-5847-8307 FAX.03-5847-8314

編集
発行



財団 法人 河川環境管理財団

編集事務局 企画調整部 担当: 入江 E-mail:irie-y@kasen.or.jp
堀江 E-mail:horie-t@kasen.or.jp

本 部 〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町11-9
住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F,3F)
http://www.kasen.or.jp/
E-mail:info@kasen.or.jp

総務部 TEL 03-5847-8301 FAX 03-5847-8308
企画調整部 TEL 03-5847-8302 FAX 03-5847-8308
研究第一部 TEL 03-5847-8303 FAX 03-5847-8309
研究第二部 TEL 03-5847-8304 FAX 03-5847-8309
研究第三部 TEL 03-5847-8305 FAX 03-5847-8310
研究第四部 TEL 03-5847-8306 FAX 03-5847-8310
東京事務所 TEL 03-5847-8306 FAX 03-5847-8310
子どもの水辺
サポートセンター
TEL 03-5847-8307 FAX 03-5847-8314
http://www.mizube-support-center.org/
E-mail:msc@mizube-support-center.org

北海道事務所 〒060-0061
札幌市中央区南一条西7丁目16-2(岩倉ビル)
TEL 011-261-7951 FAX 011-261-7953
http://www.kasen.or.jp/hokkaido/
E-mail:info-h@hkd.kasen.or.jp

名古屋事務所 〒450-0002
名古屋市中村区名駅4-3-10
TEL 052-565-1976 FAX 052-571-8627
http://www.kasen.or.jp/nagoya/
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

大阪事務所 〒570-0096
大阪府守口市外島町4-18(守口フィットネスリゾート内)
TEL 06-6994-0006 FAX 06-6994-0095
http://www2.kasen.or.jp/
E-mail:kohen@osakaj.kasen.or.jp

移転に伴う7月3日からの新住所

大阪研究所 〒540-6591
大阪市中央区大手町1-7-31(OMMビル13F)
TEL 06-6942-2310 FAX 06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp